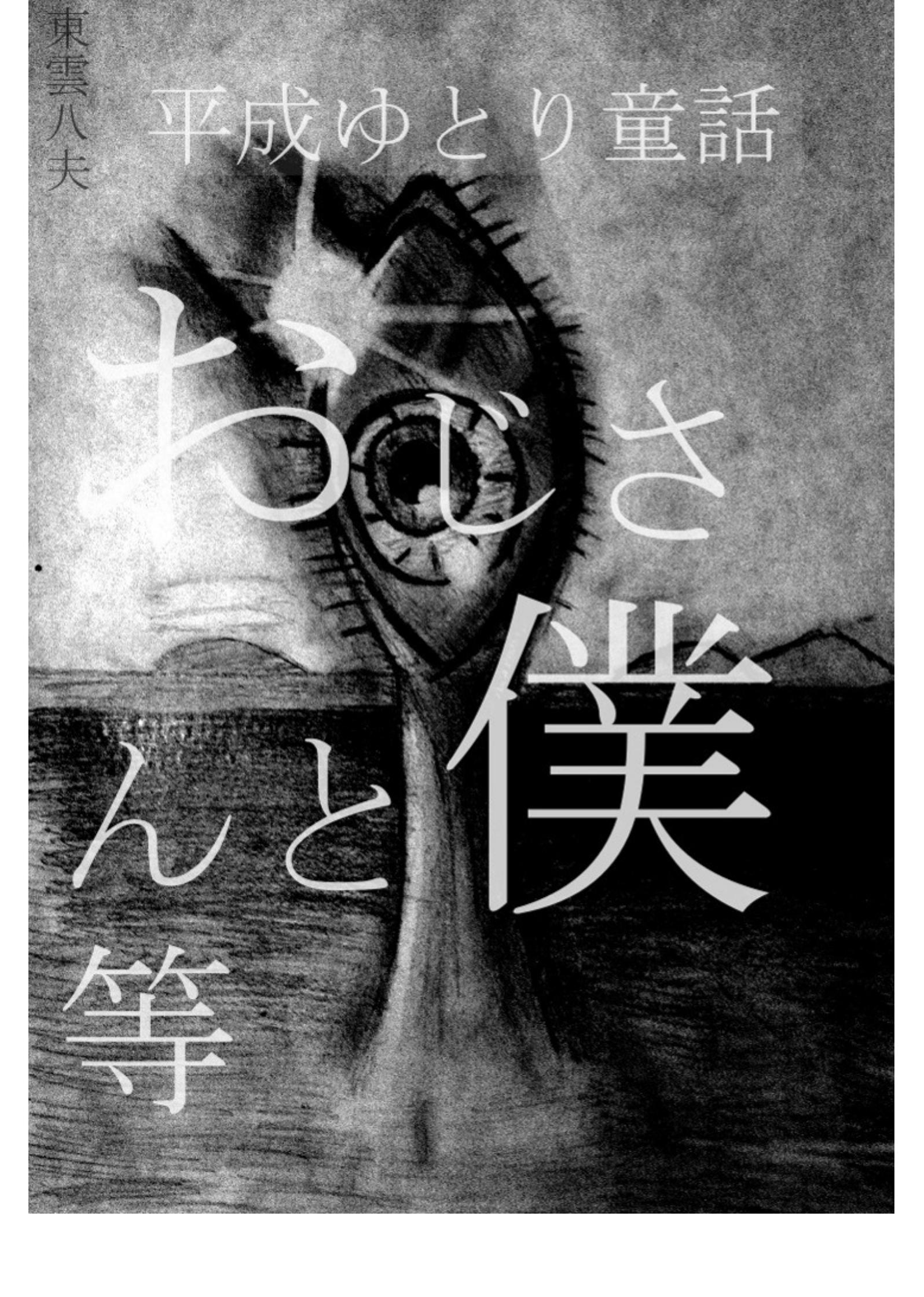


東雲八夫

平成ゆとり童話



おひさ
僕
んと
等

うねりの強い森。

東側はゴルフ場。西側は広い公園だ。流れのゆるい川があり、トンボやチョウが飛んでいる。二人の少年は、大きめのスーパーボールを投げ合いながら歩いている。一度、バウンドさせて、片手でつかむ。

道路の向こうは、駐車場。そこから、公園へ続く。

一人の少年が道路を渡りながら、白線に向かって叩きつけた。高く、弾んだ。

まっすぐに、落ちてくる。

ちょうど、ブロックのへりに当たってしまった。低い。真横に、弾んだ。

大きめの車。前のところに、すっぽりとはさまった。

少年たちは慌てた。ちょうど前から大人たちが歩いてきたのだ。二人は、何でもないような顔で、車の前を通り過ぎる。もちろん、あきらめてなどいない。森の中に入り、様子をうかがう。

大人は四人。三人は白髪だ。それぞれ、車のトランクを開け、道具をしまう。一人は、立ったまま、それを見ている。

三台、車が走り去っていく。立っていた男は、笑いながら手を振った。頭を、下げる。

男は何かに気がついた。屈んだ。立ち上がり、辺りを見回す。手には、スーパーボール。

こちらを見て、右手を挙げた。

二人は、観念したように、下を向いて出ていく。

「おじさん。ごめんなさい」

「俺、おじさんか」

男は、笑った。少年に、スーパーボールを渡す。

「やっぱり、大人の付き合いなの。ゴルフって」

手を出しながら、少年は言った。

「いや、これも仕事だよ。でも、ゴルフは好きだ」

「楽しいの」

「まあ、仕事だからね。今は。一人でやるなら、楽しいよ。向こうにある、ただ、打つだけのやつ」

「知ってる。的に向かって、打つんでしょ」

「大人になったら、そういうことも、やらないといけないの」

「そういうことって」

「好きなのに、嫌いになるんでしょ」

「別に、嫌いにはなっていないけどね。仕事になったら、やりたくないこともやらないといけないし、理不尽って奴にも耐えなくちゃいけないんだ。お金をもらってるからね」

少年は、距離をとって、スーパーボールを投げた。もう一人は、片手で受ける。

「なんか、嫌だね」

「でも、世の中の仕組みだよ。それが」

地面に、叩きつける。跳ね上がった。男は、空を見た。青い。

「僕が明日死ぬとしても、おじさんは同じことを言えるの」

はっとして、少年を見た。

「へんなこと、言うなよ」

「昨日、教室で飼ってたハムスターが死んだんだ」

もう一人が言った。

「皆が、触りすぎたんだって。先生は、可愛がってあげてねって言ったのに。まだ、きたばかりだったのにな」

「残念だったね。でも、お金は必要だよ。生きていかなくちやいけないだろ」

「明日、死ぬのに？」

「そんな簡単に死なないよ。人は」

男は、トランクを開け、道具をしまった。

「スーパーボール。ありがとう」

男の車は、静かに走り去っていった。駐車場に、もう車はない。二人はさらに間隔を広くとった。スーパーボールは、三回ほどバウンドして、相手のところに届く。

「生きるためには、いろいろ、我慢しなくちやいけないんだね」

「だったら、そんなところに行きたくないよな」

「でも、社会の中にはいたいな。無人島とかは、やっぱり、怖い」

「だったら、新しいのがほしい」

少し、強く叩きつけた。

「新しいのって。会社？」

「社会だよ。新しい社会。新社会だ」

「いいね。新社会人だ。僕ら」

「我慢しなくていいし、理不尽もない」

「でも、皆がそんなことしたら、上手くいかないよ」

「大丈夫。あのおじさんみたいのを、引き抜こう。旧社会から」

「そんな」

「仕方ないだろ。あのおじさんは、それが正しいと思ってるんだ。きっと、新社会でも、同じように我慢してくれるよ」

「嫌だって言ったら？」

「僕らが、我慢しよう。新社会を作るためさ」

「いまより、良い社会を作るためなら、仕方ないか」

「時間がかかるだろうね。でも、我慢は、その時までさ」

「もっと、いい方法があるよ。旧社会を仕切ってる奴らから、お金とか、奪おう」

「ああ、そしたら、おじさんもきっと新社会の方がいいって思うだろうね」

「やっぱり、おじさんは間違ってる」

「いつかは、新社会も、そんな風になるのかな」

「そしたら、きっと新、新社会を作る人が現れるよ」

「そうか。僕ら、おじさんになるのか」